

平成 22 年 6 月 6 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006 ～ 2009
 課題番号：18320030
 研究課題名（和文） 昭和戦前期の官展工芸における「伝統」的作品の調査研究
 研究課題名（英文） A study of “Tradition” in Japanese Academic *kogei* from 1920s to 1930s
 研究代表者 樋田 豊次郎 (HIDA TOYOJIRO)
 秋田公立美術工芸短期大学・学長
 研究者番号：40132708

研究成果の概要（和文）：

近代日本の工芸家は、「伝統」をどのように理解していたのか？ この疑問に始まる本研究は、古代中国の「楽浪漆器」に啓示を受けた六角紫水や、アール・デコ様式に魅せられた津田信夫等の個別研究を通して、「伝統は創造されるものである」という仮説を裏付けた。「伝統」の創造には、古い「伝統」の〈破壊〉と新しいその〈再構築〉という相反する二側面があることも明らかにした。これらは工芸の「伝統」思想を再定義する礎となるだろう。

研究成果の概要（英文）：

Just how was “tradition” understood among the *kogei* artists of modern Japan? This question was the beginning of this research, in which through separate studies such as on Rokkaku Shisui who received revelation from ancient Chinese Nang-nang lacquerware, or Tsuda Shinobu captivated by Art Deco style, etc., we support our hypothesis; “Tradition is invented” We also made it clear that there are two sides in invention of “tradition”, namely the “destruction” of old “tradition”, and a new “reconstruction” of “tradition”. These should be the foundations to redefine the idea of “tradition” within *kogei*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 18 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
平成 19 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
平成 20 年度	500,000	150,000	650,000
平成 21 年度	900,000	270,000	1,170,000

年度			
総計	6,200,000	1,860,000	8,060,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：伝統、近代工芸、アジア、楽浪漆器、六角紫水、小場恒吉、津田信夫、GHQ

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の工芸史研究においては、昭和戦前期の「伝統」様式が主題にされることはなかった。昭和戦前期の工芸作品といえば、パウハウスやアール・デコの影響を受けた「モダニズム」様式が主流だと考えられてきたからである。「伝統」様式が取り上げられることがあっても、それは「モダニズム」様式に対する、国内側からのカウンターカルチャーとしての評価にとどまっていた。

(2) これに対し今回の共同研究のメンバーは、「伝統」を〈様式〉ではなく、〈思想〉として捉え直した。ここで言う〈思想〉とは、工芸史をひとつの体系として成立させる基軸とでもいうべきものである。具体的には「伝統」とは、日本に同化された外来文化を、その〈破壊〉と〈再構築〉を通して創造するものである、と考えた。

私（樋田豊次郎）は『工芸家「伝統」の生産者』（美学出版、2004年）で、日本の工芸家が「伝統」を創造し続けてきたことを論じた。こうした研究が土台になって、今回の共同研究が構想された。

(3) この共同研究では、「伝統」は政治状況と工芸制作の共同作業によって創造されると考えた。政治史・文化史の分野では、昭和戦前期における「伝統」は従来から研究対象となってきた。それらの分野で芸術の「伝

統」が研究される時、その対象は地方（農村）文化運動、文化映画、生活改良、そして民芸運動などだった。したがって今回の共同研究は、政治史・文化史の研究における「伝統」の問題を、美術史の立場から補完するものだといえなくもない。しかしながら従来の研究は、「伝統」の創造はあくまでも政治が担い、一般国民や工芸家はそれを押しつけられてきたという視点に立っておこなわれてきた。今回の共同研究では、むしろ工芸家が積極的に日本国統合の原理として、「伝統」を創造してきたと考えた。

2. 研究の目的

(1) 「伝統は創られるものである」。こうした「伝統」に対する新しい考え方の提起、すなわち「伝統」思想の再定義がこの研究の目的である。今回の共同研究がこの目的を設定したのは、戦後の文化行政や工芸界が「伝統」を〈創られるもの〉としてよりも、〈型〉として理解する傾向がつよく、その弊害が工芸作品に古い技法や様式の硬直化した伝承として現れていたからである。

(2) 「伝統」を今日の生きた思想として捉え直すこと、これが「伝統」思想の再定義を試みた第1の理由である。他方、第2の理由として、「伝統」をこのように定義しなくては、明治以降の工芸史にはそれを貫徹する思

想の存在が見出せないという美術史上の要請もあった。その結果、「伝統」思想を昭和戦前期の工芸家がどのように肉付けしていったのかを調べようと考えた。

具体的にいえば、明治の工芸では「伝統」は欧米向けに捏造されることが多かった。明治にあつては、「伝統」は「東洋的なもの」として演出された。ところが昭和になると事情は一変する。この時期、工芸はその一部が桃山時代の美術様式へと回帰するのだが、それを促したのは西洋から流入するモダニズムのデザインに対抗して、日本美術の根源を探り当てようとする動機だった。これら二つの事例には、「伝統」にかんする共通概念は見られない。前者における「伝統」は演出の成果であり、後者のそれはアイデンティティの対象だった。要するに、実際の近代工芸史が、「創られる伝統」という思想の導入を要求したのである。

(3) 近代工芸史における「伝統」を大河に見立てるならば、昭和戦前期の官展工芸における「〈伝統〉的作品」とは、その流れにあらわれた光景のひとつにすぎない。にもかかわらずこれを共同研究のテーマに選んだのは、その時期の官展工芸には「伝統」という大河に流入して「伝統」を革新させる支流すなわち〈影響源〉が多かったからである。①「モダニズム」の輸入、②「桃山美術」の再評価、③古代中国の漢で製作された「楽浪漆器」の発掘などは顕著な〈影響源〉である。

このほか当時の官展工芸には、明治期に工芸の「伝統」を革新した〈影響源〉もまだ残存していた。「伝統」を欧米向けに演出するために考案された、①「日本美術と東洋美術の折衷」、②「神話や歴史物語の表象」、③「国宝制度の設置」などである。このほか今回の共同研究では〈影響源〉をさらに幅広く捉え、

「昭和戦前期」直後の工芸に關与したGHQの対日文化政策も含めた。これら〈影響源〉の個別研究を連繫させることによって、「伝統」の再定義を試みた。

3. 研究の方法

(1) 実際の調査研究に当たっては、六角紫水(漆芸)、山鹿清華(染織)、海野清(彫金)、富本憲吉(陶芸)、津田信夫(鑄金)の工芸家を取り上げた。それぞれの工芸家を通して、「伝統」にかんするつぎの視点が浮上すると予測した。六角紫水は「アジア造形文化の基層」、山鹿清華は「近代日本画の応用」、海野清は「江戸技術の革新」、富本憲吉は「九谷様式の再解釈」、津田信夫は「モダニズム・デザインの和様化」である。

(2) 各工芸家にかんする調査内容は以下の通りである。

①六角紫水(1867 - 1950)は漆芸家であると同時に、楽浪漆器の発掘調査に携わり、『東洋漆工史』(1932)を上梓した漆工史研究者としても知られる。その彼の帝展出品作品を、広島県立美術館、東京国立近代美術館工芸館、そして生まれ故郷の広島県能美島の郷土資料館等で調査する。その一方、六角紫水が平壤郊外で発掘に携わった「楽浪漆器」についても、それを保存する東京大学考古学研究室などで調査する。また楽浪漆器については文献資料によっても研究し、楽浪漆器の発見が促した「アジア造形文化の基層」という理念を考察する。

②山鹿清華は、昭和2年の帝展で特選を受賞した京都の染織家である。また、そのかたわら日本画や図案を、神坂雪佳に学んだ。京都市立絵画専門学校予科に入学し、また神坂が主宰していた佳都美会にも参加していた。さ

らに竹内栖鳳をはじめとする京都画壇の新派にも共鳴していた。本研究では山鹿清華の遺族のもとで調査し、さらに神坂雪佳の遺族をはじめ佳都美会に関係した工芸家の遺族や、京都画壇と染織業界の関係も重要であるため京都で長い歴史をもつ染織会社の千総、聚楽、丸紅、高島屋などを調査する。これらの産業界との結びつきのなかでの山鹿の役割や仕事が明らかになっていくと考えられる。

③昭和前期の彫金界で指導者的役割を果たした海野清は、まさに「伝統」を背負って立った作家であった。後に重要無形文化財保持者の任命制度が発足（昭和 30 年）すると、金工分野の第一号に任命されたことも、これを象徴する。海野清の父は、明治期金工の第一人者として知られる海野勝珉であった。海野清本人も、東京美術学校および東京芸術大学の彫金科教授として、斯界の指導的役割を果たした。父から堅実な伝統技術を継承したことは、東京芸術大学に保管されている多数の「海野家下図」や「拓本」などの資料が証明している。そこで、これらの資料の調査に着手する。そして、遺族などが所蔵する作品を調査し、「下図」や「拓本」とつけ合わせる。また、同時期の文献資料を網羅的に調査し、関連する記事を蓄積する。

④津田信夫は 1930 年頃より《動物置物》の制作を行うが、これは 1923 年からの約 2 年間のヨーロッパ留学で接したフランソワ・ポンボンなどの彫刻作品を、日本の古来より引き継がれてきた造型理念において解釈し直されたものと思われる。すなわち津田の造型意識には、常に民族性を基盤とし、それに基づき新たな「伝統」を創造しようとする考えが働いていた。今までほとんど調査されていない津田信夫の活動記録を、文献と実地調査によって解明する。作品の所在調査にあつ

ては、京都市美術館・メタルアートミュージアム・千葉県立美術館などの所蔵作品とともに、韓国ソウルの国立中央博物館の所蔵作品、アメリカ・シアトル在住の個人コレクターの所有作品を確認する。

⑤富本憲吉（1886-1963）に注目し、1936 年から 1943 年にいたる富本の九谷滞在を精査する。富本は昭和 11 年に色絵磁器の研究のために九谷に赴き、以後数回にわたり断続して北出塔次郎のもとに逗留して現地での技術の習得、研究、制作を試みた。富本の色絵磁器研究は、当初から、伝統の再解釈という明確な信念にもとづき、同時代に流行していた古陶磁再現を中心とする動きとは一線を画すものとして興味深い。本研究は、富本のみならず、戦後の色絵磁器についての「伝統」の概念を説き明かすものである。

4. 研究成果

今回取り上げた 5 人の工芸家のなかでは、六角紫水、海野清、津田信夫の「伝統」創造にかんする調査が大きく進展した。

（1）六角紫水については、シンポジウムを 2 回実施した。

第 1 回 「楽浪漆器—〈アジア造形文化の基層〉を探る試み—」（2008 年 11 月 22 日、於東京藝術大学、主催：東京芸術大学・日本基層文化研究会）

①日本に残る楽浪漆器（谷 豊信・東京国立博物館）

②楽浪漆器の製作技法（加藤 寛・鶴見大学）

③小場恒吉による楽浪漆器の文様調査」横溝 廣子（研究分担者）

④松田権六の楽浪漆器研究（増村紀一郎・東京芸術大学）

⑤楽浪漆器に触発された六角紫水の漆芸作品（宮本真希子・広島県立美術館）

⑥六角紫水の構想したアジア美術の基層（樋

田豊郎・研究代表者)

第Ⅱ回 『楽浪漆器』出土に学ぶ アジア造形文化を繋ぐ思想の研究」(2009年11月22日、於秋田公立美術工芸短期大学、主催：秋田公立美術工芸大学・日本基層文化研究会、後援：美術史学会・漆工史学会・フォーエバー現代美術館)

①関野貞・小場恒吉・六角紫水(樋田豊郎・研究代表者)

②楽浪出土の漆バスケットにかんする新解釈(呉同・高麗大学)

③楽浪墳墓出土の漆器(李栄勲・国立慶州博物館)

④楽浪郡と東アジアの国際化(早乙女雅博・東京大学)

⑤日本の美術家が構想した東亜という理念(樋田豊郎・研究代表者)

⑥李王家美術館所蔵の近代日本美術における復古のイメージ(宣承慧・国立公州博物館)

⑦津田信夫の〈伝統〉への試み(前川公秀・佐倉市立美術館)

⑧植民地期における楽浪古墳発掘と小場恒吉(鄭仁盛・嶺南大学)

⑨小場恒吉の文様史学(横溝広子・研究分担者)

(2)海野清については、その父親である海野勝珉にかんする資料集が、研究分担者の横溝廣子の編集で刊行された。〔図書〕を参照のこと。

(3)津田信夫については、今回の作品調査を踏まえて、平成22年夏に佐倉市美術館で「津田信夫」展開催の予定。

(4)このほか、近代日本工芸における「伝統」創造の個別研究として、以下の論文が「研究成果報告書 その2」で発表された。

①頭椎大刀—考古遺物が形成した〈日本神話〉という名の〈伝統〉(蔵田愛子・NPO法人AIT)

②津田信夫がめざした〈日本的なもの〉(前川公秀・佐倉市立美術館)

③GHQと無形文化財—美術工芸品の複製に対する日米の認識の相違について—(佐藤直子・文化庁)

(5)以上の各個別研究によって、「伝統」思想の再定義をおこなう基礎固めができた。ただし個別研究を通して、「伝統」の創造には古い「伝統」を〈破壊〉する側面と、新しい「伝統」を〈再構築〉する側面の、相反する二面があることも明らかになった。そこで今後は、〈破壊〉の側面を六角紫水が携わった「楽浪漆器」の研究によって、〈再構築〉の側面を今回の科研の「報告書 その2」に掲載した、「神話や歴史物語の表象」、「モダニズム・デザインの和様化」、「GHQの対日文化政策」などの研究によって進展させ、それらの成果を単行本として刊行する。

最終的には、「伝統の創造とは、日本に同化された外来文化の〈破壊〉と〈再構築〉のくり返し作業である」という理論の確立を目指す。この理論は、外来美術の日本への「同化」それ自体を基軸に据えてきた従来の文化政策や日本美術史の言説、すなわち日本美術は「移植芸術」であるという解釈に対し、その見直しを迫ることになるだろう。また、日本にも移植芸術とは異なる独自の芸術が生まれる根拠を提供するだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

樋田豊郎(豊次郎)、「明治工芸とゴジラー日

本美術に潜む蛮性、あるいは日本美術の破壊的創造」、秋田公立美術工芸短期大学紀要、査読無、14号、2010、pp. 1~12

前川公秀 (研究協力者)、「津田信夫がめざした〈日本的なもの〉」、昭和戦前期の官展工芸における〈伝統〉的作品の調査研究 研究成果報告書 その2、査読無、2010、pp. 25 - 42

佐藤直子 (研究協力者)、「GHQ と無形文化財—美術工芸品の複製に対する日米の認識の相違について」、昭和戦前期の官展工芸における〈伝統〉的作品の調査研究 研究成果報告書 その2、査読無、2010、pp. 43 - 64

蔵田愛子 (研究協力者)「頭椎大刀—考古遺物が形成した〈日本神話〉という名の〈伝統〉」、昭和戦前期の官展工芸における〈伝統〉的作品の調査研究 研究成果報告書 その2、査読無、2010、pp. 7 - 23

〔学会発表〕 (計3件)

樋田豊郎 (豊次郎)、「日本の美術家が構想した東亜という理念」、シンポジウム『『楽浪漆器』出土に学ぶ アジア造形文化を繋ぐ思想の研究』(主催：秋田公立美術工芸短期大学・日本基層文化研究会、後援：美術史学会・漆工史学会・フォーエバー現代美術館)、2009年11月22日、発表場所(秋田公立美術工芸短期大学)

横溝廣子、「小場恒吉の文様史学」、シンポジウム『『楽浪漆器』出土に学ぶ アジア造形文化を繋ぐ思想の研究』(主催：秋田公立美術工芸短期大学・日本基層文化研究会、後援：美術史学会・漆工史学会・フォーエバー現代美術館)、2009年11月22日、発表場所(秋田公立美術工芸短期大学)

前川公秀 (研究協力者)、「津田信夫の〈伝統〉への試み」、シンポジウム『『楽浪漆器』出土に学ぶ アジア造形文化を繋ぐ思想の研究』(主催：秋田公立美術工芸短期大学・日本基

層文化研究会、後援：美術史学会・漆工史学会・フォーエバー現代美術館)、2009年11月22日、発表場所(秋田公立美術工芸短期大学)

〔図書〕 (計3件)

樋田豊郎 (豊次郎)、思文閣出版、「明治工芸論」(128頁-149頁)、稲賀繁美編『伝統工芸再考 京のうちそと—過去検証・現状分析・将来展望—』所収、2007、833

横溝廣子、思文閣出版、「明治政府と伝統芸術」(150頁-162頁)、稲賀繁美編『伝統工芸再考 京のうちそと—過去検証・現状分析・将来展望—』所収、2007、833

横溝廣子、東方出版、『海野勝珉下絵・資料集 東京芸術大学大学美術館所蔵』、2007、150

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋田 豊次郎 (HIDA TOYOJIRO)
秋田公立美術工芸短期大学・学長
研究者番号：40132708

(2) 研究分担者

松原 龍一 (MATSUBARA RYUICHI)
京都国立近代美術館 主任研究員
研究者番号：40270491
横溝 廣子 (YOPKOMIZO HIROKO)
東京芸術大学大学美術館 准教授
研究者番号：90205229

(3) 研究協力者

前川 公秀 (MAEKAWA MASAhide)
佐倉市立美術館・館長
山田 敦雄 (YAMADA ATSUO)
目黒区美術館・学芸員
佐藤 直子 (SATO NAOKO)
文化庁伝統文化課・主任調査官
島津 京 (SHIMAZU MISATO)
東京芸術大学大学美術館・助教
研究者番号：80401496
蔵田 愛子 (KURATA AIKO)
NPO 法人 AIT・事務局長